20240929 聖霊降臨節第 20 主日礼拝

司式:土屋昌子
奏楽:堀口恵美

前奏 :「キリストよ、世の人すべての慰め」 (J.S.バッハ)

招詞 : 主に望をおく人は新たな力を得　鷲のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない。(イザ40:31)

讃美歌 202「よろこびとさかえに満つ」

交読詩編 147:1-11

01 ハレルヤ。わたしたちの神をほめ歌うのはいかに喜ばしく/神への賛美はいかに美しく快いことか。
02 主はエルサレムを再建し/イスラエルの追いやられた人々を集めてくださる。
03 打ち砕かれた心の人々を癒し/その傷を包んでくださる。
04 主は星に数を定め/それぞれに呼び名をお与えになる。
05 わたしたちの主は大いなる方、御力は強く/英知の御業は数知れない。
06 主は貧しい人々を励まし/逆らう者を地に倒される。
07 感謝の献げ物をささげて主に歌え。竪琴に合わせてわたしたちの神にほめ歌をうたえ。
08 主は天を雲で覆い、大地のために雨を備え/山々に草を芽生えさせられる。
09 獣や、烏のたぐいが求めて鳴けば/食べ物をお与えになる。
10 主は馬の勇ましさを喜ばれるのでもなく/人の足の速さを望まれるのでもない。
11 主が望まれるのは主を畏れる人/主の慈しみを待ち望む人。

朗読聖書　マルコによる福音書 2:1-12

◆中風の人をいやす

01 数日後、イエスが再びカファルナウムに来られると、家におられることが知れ渡り、
02 大勢の人が集まったので、戸口の辺りまですきまもないほどになった。イエスが御言葉を語っておられると、
03 四人の男が中風の人を運んで来た。
04 しかし、群衆に阻まれて、イエスのもとに連れて行くことができなかったので、イエスがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした。
05 イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われた。
06 ところが、そこに律法学者が数人座っていて、心の中であれこれと考えた。
07 「この人は、なぜこういうことを口にするのか。神を冒涜している。神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」
08 イエスは、彼らが心の中で考えていることを、御自分の霊の力ですぐに知って言われた。「なぜ、そんな考えを心に抱くのか。
09 中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。
10 人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に言われた。
11 「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい。」
12 その人は起き上がり、すぐに床を担いで、皆の見ている前を出て行った。人々は皆驚き、「このようなことは、今まで見たことがない」と言って、神を賛美した。

祈祷

天地万物を創造し、永遠に私たちを導いてくださるイエス・キリストの父なる神さま、聖霊降臨節第 20 主日の朝(あした)、あなたは私たち一人ひとりの名を呼び、今日もキリストの体である教会へと集めてくださいました。あなたが示された大きな恵みを感謝致します。

主よ、あなたは過ぐる一週間、あらゆる善いもので私たちを養い、導き、支え、慰め、励ましてくださいました。あなたが私たちに示された愛は計り知ることが出来ません。しかし、顧みて、私たちの歩みはあなたの御心に適うものではありませんでした。言葉と行いにおいて心の奥底にある恐れや反抗心が頭をもたげることもしばしばありました。人との係わりに疲れ顔を向けるべき相手から目を逸らし、社会に目を向けるどころか家族や友人を顧みることさえ忘れてしまう日もありました。真にあなたが私たちの一つひとつの行いに目を留め審かれるのであれば、私たちはあなたの前に立つことは出来ません。

しかし神さま、あなたはそのような私たちを見捨てることなく、今日の礼拝に招いて悔い改めの機会を与えてくださいました。私たちはあなたの恵み深い聖名を崇めるためだけに集まって参りました。一人ひとりの思いは混乱し、整わず、涙の内にあって、あなたを求めて参りました。ただあなたの御恵みによってのみ、御前に立たせてください。私たちの歩みが強く、確かであるようにしてください。あなたは私たちの生と死の主であり、イエス・キリストによって真実と真理とを示し、また私たちが生きるために必要な一切の物を与えてくださいます。そのことをこの礼拝において感謝致します。

生ける神さま、あなたは造り主として私たちの神であり、イエス・キリストとして私たちの側に、また私たちの身近にあって、また聖霊として私たちを支配されます。どうかこの礼拝の時、日常の一切を忘れ、この世の歓びではなく、あなたを歓ぶ喜びによって心が照らされ、私たちの生涯を献げる思いをもって人に尽くすことが出来ますように。

あなたが造られたこの世は、あなたの思いに適わず、戦いが戦いを呼び、中東や東ヨーロッパは戦禍と混乱の中にあります。日本の各地で度重なる地震や豪雨もまた人々を苦しめています。あなたが救われようとする世界にあって立てられたあなたの教会もまた、あなたの恵み深いご支配を伝えることに無力です。主よ、私たちを赦してください。

しかし、あなたはキリストにあってこの世界を愛し、私たちは主が日毎に来てくださり、私たちを助け導き、更に、この世界の全き救いのために来てくださることを祈り求めています。どうか私たち一人ひとり、また教会が世にあるかぎり、あなたの恵みを証しし、忠実な僕として仕えることが出来ますように。

これから説教を聴こうとしています。本日は北海教区より三浦忠雄先生をお迎えし、礼拝をお献げ致します。どうか、聖書の真の響きを私たちに響かせてください。

あなたは苦しみを知っておられます。重荷を負う者、歳老いた者、病める者、またこの世に生きるために真剣に戦い、あるいはこの世で重い軛を負う全ての人を助けてください。私たちの日本キリスト教団が、また諸教会が、主の教会として成長するよう、お導き下さい。

御言葉に養われて主キリストを告白する者として平和を祈り求めつつ、再臨の主を望みます者と為さしめてください。主の聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌 409「すくいの道を」

説教「交代可能おみこし型支援」　　**三浦忠雄**

（北海教区道北地区・留萌宮園伝道所）

マルコによる福音書2:1-12を用い**「交代可能おみこし型支援」**と題して共に御言葉をお聴きしたいと思います。

今日はお招き戴きありがとうございます。ほとんどの方が初めてであるかと思いますが、留萌宮園教会の牧師をしております三浦と申します。どうぞよろしくお願い致します。

先程牧師先生からこの教会のことを少し伺いました。一時間以上かけて夫々の地域からこの礼拝に集まって来られていると伺いましたが、時間をかけてこの教会に集まり、共に礼拝し、祈る、この教会を大切にしながらこの場に集まってこられる皆さんに対して敬意を表します。信濃町教会の状況は私の牧会している教会とかなり異なっているので若干我が教会を紹介させて頂きたい。

札幌から日本海側稚内に向かい約130㎞北上した所にある留萌、そこの教会に赴任して27年を迎えています。この地区は道北地区と申し、北は稚内、南は富良野、その距離300㎞。東は興部（おこっぺ）、西は留萌、その距離約200㎞。このダイヤモンドの形をした地区に、教団の10教会、1道北センター、牧会者は少なくなり、今は4名、私は留萌宮園教会と100㎞峠を越えた士別教会を昨年から兼牧。同時に2004年から「アイヌ民族情報センター」主事を兼任、本日午後「アイヌ民族とキリスト教」をテーマにお話しさせてい戴く予定。

留萌教会は会員数15人に満たない小さな、そして創立38年という若い伝道所。1986年、新規伝道として始まり11年後に牧師引退で私が引き継ぐことになりました。留萌人口も激減し、赴任時27年前は人口約3万人が今は1.7万人と半減。小中学校も統廃合され、二つの高校は一つに、専門学校はとうの昔に廃校、就職場所もなく、ほとんどが進学、就職で高校卒業と同時に子供たちは外に出て行く。留萌の特産品としては数の子、その加工工場が沢山あります。以前はニシンが沢山獲れたのでそこからの名残ですがが、今はカナダ、ロシア産ニシンを留萌で加工し全国に出荷、正月用「数の子」の大体は留萌産、全国70%をシェアーしている、しかし若者の就職先はなかなか見つからない、子供も減っているという状況にあります。

そのような中、教会は何時も子供に溢れています。10数年前から近所の子供たちが遊びに来るようになり、今は毎日学校が終わってから門限まで教会に来て大騒ぎして遊んで帰っていく。牧師館と一つになった小さな教会だが、教会堂、牧師館、全てを使って鬼ごっこをしたり、カードゲームをしたりで、何時も賑やか。「子供広場」という名前で数年前から親たちにもここが安全な所であることをパンフで宣伝してこの場を提供、時には一クラスの半分以上の子供たちが教会にやって来て大賑わい、今現在も小1から高校生まで、連日賑わっています。

家庭的に問題のある子供たちが多いので、食事提供もしています。そういう子供たちが日曜日は朝から来ている。朝ごはんが食べられる、昼も食べられる、夕ご飯代わりのボリュームあるおやつもたっぷり、そして一日中遊んで帰れる。午前中、ちょっと礼拝に参加すれば、ずっと居られることを知って朝から子供たちが来るようになりました。そのキリスト教を全く知らない子供たちが、礼拝堂に並んだときは、賑やかで大変な状態であったが段々と大人の雰囲気を感じていくのでしょう。そして後ろの方で真剣に祈り、一生懸命大きな声を出して讃美歌を歌っている大人たちを感じながら成長していく。この様な合同礼拝を行なっているが、その内に子供たちが司会をやりたいというようになった。そうすると自分が司会をするときに煩くしてもらったら困るので、自分が席にいる時は邪魔しないように静かにしようという形が働いて段々と成長、静かに礼拝に参加し讃美歌も歌うようになり、学校で讃美歌の大合唱が始まったこともありました。

そういう形で子供たちが成長し、何も分からないけれども一週間に一度の礼拝で聖書の一か所を暗唱聖句として憶えて帰る。そのことがいずれ成長して大きな力になることを願いながらこの活動を続けさせていただいている。このような活動ができるのも、農業関係のキリスト者たちがお米を提供してくださる、あるいは「共働学舎」というグループが豚肉や卵を提供してくださるなど、多くの方たちに助けらえて、この活動ができている。夏休みなどは訳アリの子供たちのお泊り預かり会も頻繁に行い、連日食事の準備、毎日5-6合のお米が底をつくような日々。巷でお米が無かったことを後で聴いたが、教会には子供たちのためのお米が沢山あって、何時も満腹の状態であった。このような働きができるのも、多くの方たちの協力を戴いているからです。信濃町教会からも毎年ご支援を戴いており、心から感謝を申し上げたい。

私の生まれは北海道の炭鉱町、親の転職で10歳から東京千代田区大手町に住み、そこから親の繋がりで代々木教会に自転車で通っていた。ですからこの教会も50年ほど前、中学校時代の3年間、この近くを通っていた。そのことを思い出しながらこの教会に親しみを感じている次第です。

さて、今日の聖書箇所、この個所は私の大好きな個所です。5人の友人が登場。その中の一人は中風という重い病気を患っていた。中風は脳出血などによって起こる半身不随、手足麻痺の病気です。その痛みを他の4人は自分の痛みとして感じ、どうにかして直りたいと心から願い祈っていたのでしょう。みんなでイエスさまの所に向かって行く。ご存じのようにこの時代には病気になるということは罪人となることであった。そのことは今日の聖書箇所後半からも分かることだが、当時のユダヤ教文献でこのような文が残されている。タルムード・ネダリュームの一節「病人は彼のあらゆる罪を神が赦してしまうまでは病気から立ち直ることがない。」“人に避難されて当然の過ちを犯したからその人は病気になった。だから病人は罪人だ。”こう考えられていた。更にユダヤ教の考え方では旧約レビ記11-17章に詳しく書かれているように、この罪や汚れは外から付着するもの、従って、触れることによっていわば伝染するもの、とされていた。とすると今日の聖書箇所で、病気の友人を連れて来た人たちは自らも病気を負っていたのか、自らも病みながら自分より重症な友を連れてイエスさまに会いに来たのか。それも素敵な話ではある。あるいは自分は病気ではないけれど、罪が伝染することは知りながらも、友の床を持ちイエスさまの所に来た、ということであろうか。いずれにしても友が癒されることを心から願って、5人が力を出し合ってイエスさまの所に来たことが記されているわけです。

イエスさまの居られる家は大勢が押しかけていた。5人の目の前に人の壁が立ちはだかった。家の前に来て唖然とし彼らは悩んだことであろう。それでも病の友を思う一心で、集会している家の屋根に上って屋根をひっぺ替えして友をつり下ろした、大変大胆な行動です。友人たちは一心だったのであろう。(寝ていた床の)四隅を吊るし、息を合わせ、真剣にその友

人を下ろしたのでありましょう。想像するに、これは大変な神経を使うこと。床の四隅を縛り静かに降ろしていかなければならない。誰かが咳でもし揺れたら病人は転げ落ちてしまう。慎重に、慎重に、降ろしていく。友を助けたい、だが自分たちではこれ以上何もできない。もうお手上げだ。イエスさまならどうにかしてくださる。そう考えて5人が悩み苦しんでいるその課題を「床のまま」、ありのまま、イエスさまの下にお見せした。そして“助けてください”とお願いしたのです。下に居たイエスさまをはじめとする大勢の方たちは驚いいたことであろう。

屋根を剥すことは、今まで溜まっていた埃、煤が煙のように落ちてきたと想像できます。“何があったのだ、なんと迷惑なことをしてくれたのだ”と周りは考えたかもしれません。その埃塗(ほこりまみ)れになっていた所に何やら大きな板が降りてくる、その板が降りて来るにしたがって天井から陽が差し始め、埃塗れになっている4人の顔がシルエットとして現れる。降りて来た物を見ると一人の病人が居る。私は5人の友人と今まで言い続けているが、4人は息を合わせて慎重に病人を降ろしたが、板の上に載っているその人もバランスを保つべく息を合わせていたと思う。ですからこれは5人の共同作業であろうと思います。

イエスさまはその願いに応えられました。彼らの信仰、信頼を見て、であります。イエスさまはこの一人の抱えられてきた人を癒されることでこの5人の願い、共同体全体の願いに応えられたわけです。一人の病人だけが癒されたというのではなく、5人の祈りに応えられた、つまり5人が癒されたのです。ここには5人の素敵な理想的な友情が表されています。互いの重荷を分かち合い、祈り合い、そして時には一緒に泥を被り癒されていく。関係を含め育まれていく、そういう交わりであります。

実はイエスさまの活躍された時代の200年も前からユダヤ教の中で「**ハブラー**」という会が定着していた。この会はレビ記に書かれている清めの規則を自らお互いにしっかりと守り、十分の一の税金も厳格に守ろうとする意図のもとに結成された団体です。「**ハブラー**」とはヘブライ語の「**友だち、同僚**」**ハーベール**(חָבֵר)から付けられている、所謂「友だち集団」というグループです。彼らにとっては律法を守っているかどうか疑わしいと思われる者たちは、全て「**罪人**(**ハッター** חַטָּא)」**アム・ハアーレツ**(am ha-aretz)として排除し、罪人とは決して接することをしなかった。当然一緒に食事もしないし、食事を用意させない、清められていない食器、汚れた食べ物は食さない、そういうグループであります。「友だち」というグループ名でありながら、どんどん汚れた者、病を負った人を切り捨て行った「**ハブラー**」、自分の身を清く保たせるためにそのようなグループを結成していた「**ハブラー**」、それと対照的に今日のテキストを見ると、なんと素敵な友情物語が示されていることか、ということが分かります。私たちの交わりもこの5人のような素敵な交わりでありたいと心から願います。互いに重荷を分かち合い、祈り合い、癒されていく、そういう交わりです。

私が招かれた留萌のある北海教区は、この5人のような交わりを目指していると感じています。或る牧師が他の教区の方に、北海教区がどういう教区かを三つのキーワードから紹介され、なるほどと感心した。そのことを紹介させて頂きます。一つは、“弱さを絆に”、ということ。二つ目は“痛みを分かち合う”、三つめは“違いを豊かさとする”であります。

(一つ目)北海教区は広大な地域に小規模教会が多くあります。教区内に60以上の教会があるが、ほとんどが留萌と同じような小規模教会であります。冬は寒く厳しく、隣の教会が100㎞以上ある教会がほとんどで孤立しやすい。しかし互いに距離が遠いからこそ、小さいからこそ孤立することなく、互いに連帯することを大切にしてきています。弱さを知るが故に繋がり合うこと、祈り支え合うことの豊かさを経験してきたわけです。弱いが故にその弱さを絆として互いに結び合わさっている教区です。誰もが弱さを抱えています。この5人の友人たちもそうだったのではないかと想像するのです。時に誰かが挫折し、落ち込み、あるいは他の一人が大失敗をやらかし、弱くなって落ち込んだり、床に臥せたりしたときに、周りが抱える、それはさながらに弱った人を支え元気になったら今度は別の弱った人と交代する。そんな助け合いをしていたのではないかと想像するのです。それは私たちもそうではないでしょうか。そのことを「**交代可能おみこし型支援**」という形でメッセージの題にさせて戴きましたが、そのような支援を互いに何時でも交代できる、だから自分が頑張って、どうにか自分が支えなければ・・、というふうに思い続けるのではなく、時に倒れて「おみこし」に乗せて戴き、そして元気になったら次の人を支える、というような繋がりを持ち続ける、そういう係わりでありたいと思います。

二つ目の“連帯は痛みを伴う”、に関しては弱い者が犠牲になって、強い者が生き残るのが世の常であるが、自分たちはそうではない。弱さを引き受け合う、具体的には多くの負担金を出し合って連帯を志そうとしているのが北海教区であります。それは痛みの伴うことでもあります。それを理解しあって痛みを伴うそういう支え合いをしています。

三つめは今日の話題からそれますので略しますが、私は北海教区の連帯の在り方は、今日の5人の友人と重なると思いますし、北海教区のみならず教区を超えてこの連帯は強められている。そして今後も広げられていったらいいなと願う次第です。

最初にも申し上げたことですが、この私の住んでいる留萌という片隅の教会、小さな教会を、この(信濃町)教会がずっと覚えて毎年献金を送ってくださっています。これも教区を超えての繋がりであると思い、心から感謝する次第です。信濃町教会のホームページを見させていただきましたが、信濃町教会の「目標、目指すもの」の文章の中にこういう文章がありました。「わたしたちとこの世界を極みまで愛し、十字架にご自身を捧げられたイエス・キリストに従い、この時代とこの世界の苦しみを共に担っていく。」大変、共感致しました。世界を極みまで愛し尽くしてくださったことを感謝して、この時代とこの世の苦しみを共に担っていく。痛みを分かち合いながら、弱さを持ち合わせながら、互いに認め合い、課題を共有し合ってイエスさまの前にありのまま、お手上げ状態の現状を差し出して、“何とかしてください”と願う、そして何時も助けて戴いて歩んで行く。それは過去もそうでしたし、これからもそういう歩みを続けていきたいと心から願います。

お祈りを致します。

主なる神さま、今日のこの時を心より感謝致します。今日の聖書を通して、互いに弱さを認め合い、支え合って歩んで行くことの大切さを覚えました。また常にあなたが私たちを守り導き助けてくださることを覚えました。互いに支え合い、交代し合って、休める時には休み、そしてお互いを大切にし合う、その歩みをこれからも続けていくことが出来ますように、どうぞ導いてください。

主の御名によって、祈ります。アーメン。

讃美歌 419「さあ、共に生きよう」

献金・感謝・主の祈り(中川信明)

イエス・キリスト父なる神さま、聖名を賛美致します。今日も一人ひとりの名前を呼んで、この礼拝堂へと集められ、またライヴ配信を通して共に礼拝を守ることが出来ましたことを感謝致します。

今日は特別に、北海教区留萌宮園伝道所の三浦忠雄牧師を招き、特別に御言葉の説き明かしを聴くことが出来ましたことを感謝致します。私たちが夫々の弱さを抱えながらも、共にあなたを信じて助け合い、支え合い、時には交代をしながらも、交わりをもってあなたの下に、あなたに従ってこれからも歩んで行くことが出来ますようにお導きをお願い致します。

三浦先生には午後から、また講演を伺いますけれど、どうかそこにもあなたが共に居てくださり、良き学びの時が与えられますようにお願い致します。

私たちは日々の生活の中であなたから多くの糧を与えられておりますけれど、そのほんの一部をここにお献げ致します。どうかあなたが御用のためにお使いください。私たちはこの週もあなたに従って歩んで行きますけれど、どうかあなたが与えてくださいました「主の祈り」を共に祈り、この一週間の始めとさせてください。**「主の祈り」**…アーメン。

讃美歌：90「主よ、来たり、祝したまえ」

派遣・祝福：主イエス・キリストの恵みと、神の愛と、聖霊の豊かな助けとが、ここに集う私たち一人ひとりの上に、そして全ての人々の上に今日も後も永遠に豊かにありますように。アーメン。

報告：会員消息 9/9(月)、池田美智子さんが逝去されました。99 年の地上でのご生涯でした。葬儀はご家族によって執り行われました。9/28(土)行木康夫さんが逝去されました。葬儀は 10/1(火)午後 1:30 より当教会礼拝堂で執り行います。お二人が今、御国で安らかでありますように。またご家族近親の方々に、主の慰めがあるようにと祈ります。以上謹んでお知らせいたします。(佃牧師)

後奏：「後奏曲」 (F.メンデルスゾーン)